

KAFM-WJ 041

タイトル

ポスト近代型能力を涵養するリカレント教育プログラム
における学習者の認識
——「SCL養成講座」第7期参加者アンケートの分析を
通じて

著者

大山溪花・近藤薫・柴田惇朗・F.ジャパン・紙本明子・大
石達起・末長英里子・蓮行

発行年月日

2025年3月12日

監修

松井 啓之教授

タイトル:ポスト近代型能力を涵養するリカレント教育プログラムにおける学習者の認識 ——「SCL養成講座」第7期参加者アンケートの分析を通じて

著者:大山溪花・近藤薫・柴田惇朗・F.ジャパン・紙本明子・大石達起・末長英里子・蓮行

アブストラクト

近年、リカレント教育やリスキリングが注目され、政府も「人への投資」としてこれらの推進に力を入れている。特に、VUCA時代と呼ばれる現代社会において、「ポスト近代型能力」としてのソフトスキル(創造性、コミュニケーション能力、ネットワーク形成力など)の重要性が高まっている。本稿では、「ポスト近代型能力」を涵養するリカレント教育プログラムにおける受講生の経験に焦点を当て、関西大学で実施された「ソーシャルコミュニケーションリーダー養成講座(SCL)」を事例として分析した。SCLは、多様なバックグラウンドを持つ受講生がコミュニケーション・ファシリテーションの技術を学ぶことを目的としたプログラムである。

本研究では、SCLの受講生に対して実施した事前・事後アンケートの回答を「うえの式質的分析法」を用いて分析した。その結果、受講生の動機は主に「コミュニケーションへの課題意識」と「他者への関心」の二つに分かれ、前者は仕事への活用を、後者は人間的成長を志向していたことが明らかになった。また、事後アンケートでは、受講生が「知識の蓄積」と「体験的な効用感」を同時に得ている一方で、知識の欠如感や体験を通じた不能感も生じていることが示された。これらの結果から、受講生は「ポスト近代型能力」を学ぶ過程で、新たな気づきを得るとともに、さらなる学習の必要性を認識していることがわかった。

(587字)

キーワード:リカレント教育、ポスト近代型能力、ソーシャルコミュニケーション、ファシリテーション

1 はじめに

近年、リカレント教育やリスキリングが注目されている。2021年には菅内閣下で「成長戦略実行計画」には「リカレント教育の推進」が盛り込まれ、2024年に岸田内閣はリスキリングを主要政策の一つとして5年で1兆円の支援策を含む取り組みを行う姿勢を示した(山田 2023)。リカレント教育とリスキリングは、ともに社会人の学び直しの形態である。リカレント教育は1973年のOECDの教育研究革新センター(CERI)の報告書を短所として広がった概念であり、個人の生涯を渡っての種々の教育機会を指す(砂原・金 2022)。対して、リスキリングは雇用者が主体となるリカレント教育に対して、企業が主体となり、「被雇用者全員に新たな価値を創出してもらうために必要なスキルを学ばせる」活動を指す(宮崎 2023:2-3)。これらの動きはともに「人への投資」という政府方針の根幹として位置づけられている(山田 2023)。このような盛り上がりの反面、社外教育の推進は伸び悩んでいることも知られている。GDPに占めるOJT以外の人材投資額が諸外国で突出して低いこと(2010-2014で0.1%)、リカレント教育などの社外教育に参加しない人の割合が高いこと(2019年時点で46.3%)などの数字は、国際競争力ランキングにおける日本の順位低下(2020年時点で34位)にあらわれていると考えられている(本田 2023)。

本稿で特に着目したいのは、「ポスト近代型能力」を涵養するリカレント教育プログラムについてである。リカレント教育には様々な種類があり、DXなどジョブ型雇用に資する具体的技術を涵養するものが注目されやすく、実際の業績の向上などへの直接的な寄与が把握しやすい。しかし、中には「コミュニケーション」などのソフトスキルを対象としたプログラムも存在する。このようなソフトスキル(創造性・個性・能動性・ネットワーク形成力など)は1990年代以降の「ポスト近代社会」においてより求められようになった。その背景としてはVUCAなどとも評される、流動性・予測不可能性の高い社会を航行するスキルとして注目されている点にある。このような能力を本田(2005)に倣って以下、「ポスト近代型能力」と呼びたい。「ポスト近代型能力」は近年、採用などの現場で継続的に重視されており、「ポスト近代型能力」は社会人として重要なスキルであるとみなされている。経団連が企業に実施していた新卒採用に関する調査では、新卒学生に求める能力は2018年まで16年連続で「コミュニケーション能力」であった(濱中・三井 2021:37)¹。一方、「ポスト近代型能力」は「努力やノウハウとなじまない性格のものであり、標準的なテストでは測定することができない不透明なものである」(本田2005:23-4)などとも指摘されている。そのため、この重要都民される能力がいかに学習されるのかに関しては、課題であり続けていると言える。

本稿の目的は、「ポスト近代型能力」を涵養することを謳うリカレント教育プログラムにおける学習者である社会人受講生がここで教授されている内容をどのように理解しているか、分析することである。すなわち、ここで捉えようとするのはリカレント教育プログラムの内容それ自体ではなく、その経験を受講生がどのように捉えているかである。後述の通り、本研究はデータ量的に萌芽的なものであり、ここでの分析をもってリカレント教育プログラムの経験に一般化することは難しい。このような経験的なデータの積み重ねによって労働者にとってのリカレント教育の意味付けや経験がより明らかになるという信念に基づき、一ケーススタディとして捉えられたい。

2 方法

分析に入る前に、本稿で分析する事例と分析の方法を概略する。本稿では2024年7月13日から9月7日にかけて関西大学梅田キャンパスで行われた、「ソーシャルコミュニケーションリーダー養成講座 関西大学7期」(以下SCL)を事例として取り上げる。SCLは「企業における会議、学校や

¹ 一方、計量分析などの手法を用いた研究では「コミュニケーション能力」が実際の採用では重視されていない可能性が示唆されている(吉岡 2018)。本稿においても、「ポスト近代型能力」の実質的な重要性は括弧に括り、あくまでも重要性を指摘する言説が多数存在する点を焦点化して分析を行うものとする。

ワークショップ等の学習の場、高度な専門家同士の知的生産の場といったさまざまなコミュニケーションの場面において、個々の多様性を活かすコミュニケーション環境をデザインし、ファシリテートすることのできる支援人材を養成する講座」(関西大学 2024)として説明される。この説明から、「ポスト近代型能力」を涵養する——より正確には、「ポスト近代型能力」を養成する技術としてのコミュニケーション・ファシリテーションを行うための技術を涵養する——という目的を理解することができる。

SCLは社会人向けリレー講座として位置づけられる、リカレント教育のための講座である。学生も参加可能であるが、実際には学生の参加は限定的であり、アンケート回答者にも1名のみみられた。実質的に本講座を「ポスト近代型能力」を涵養するためのリカレント教育の場と捉えることは妥当であると考えられるため、本稿の事例として取り上げる。

SCLは「演習」(講義形式)、「研修」(ファシリテーター・前期修了生によるワークショップ形式)、「実習」(受講生自身によるワークショップの実践)の3科目からなる。講師は大学に籍を置く研究者4名、会社経営者、グラフィック・ファシリテーター、マイム俳優の計7名で構成されており、それぞれ3時間の演習または研修を担当する(運行のみ2回)。具体的なスケジュールに関しては表1を参照されたい。

本稿ではSCLの受講生に対して講座の前後にアンケートを行ったものをデータとして取り扱う。有効回答数は事前アンケートが18件、事後アンケートが16件であった。アンケート内では短文記述式と多肢選択式の質問が設けられた(具体的な質問は表2・3を参照)。アンケートの収集にあたっては任意である点、協力が無い場合でも授業評価への影響がない点を明示したうえで行っている(詳細は図1を参照)。

本稿の分析においては、「うえの式質的分析法」(以下、「うえの式」)を用いる(上野監 2017; 上野 2018)。「うえの式」は川喜田二郎が開発したKJ法を発展させてあものであり、質的データの全般的分析に用いることのできる手法である。「うえの式」の手順は要約すると、以下のようなシンプルなものとなる。

- ①情報のユニット化:情報の連なりの中から「ユニット」としての情報を引き出す段階。インタビューデータの場合、語りの流れから「ユニット」を引き出し記述する、という作業となる。
- ②カテゴリーの生成:「ユニット」同士をメタ的な関連性から一つのラベルのもとで統合する作業。新たに作られたラベルを「カテゴリー」と呼ぶ。
- ③マッピング・チャート化:カテゴリーを関連性に応じて近く・遠くに配置し(マッピング)、カテゴリー同士を因果・対立・相関の三つの関係性で結ぶ(チャート化)。
- ④ストーリー化:マッピングとチャート化に応じて文章の形で文脈を再記述する。
- ⑤時代背景や文化をふまえた考察

以下、3章以降において、上記の流れを踏襲して分析・考察を行う。

今回はインタビューではなく、アンケートの短文記述をデータとして用いる。そのため、①のプロセスはデータ収集時点で完了しているものとする(短文回答それ自体を「ユニット」とみなして分析を始める)。具体的に今回分析に用いるのは、以下の質問項目である。

【事前アンケート】

質問3:どのようなことをきっかけに受講を決められましたか

質問4:本講座でどのようなスキルが身につくことを期待されますか？

質問5:本講座を受講する目標・目的はなんですか？

【事後アンケート】

質問4:質問3(期待していた内容との比較)の回答理由について、お聞かせください。

質問5:演習・研修(講師／前期生による講義)の中で特に印象に残ったコマをその理由とともに教えてください。

質問6:実習で印象に残ったことを教えてください。

質問7:受講全体を通じて、学びになったことや得られたこと、今後活かそうなことを教えてください。

なお、本研究は、令和6年7月9日に「多様性寛容の教育・交流プログラム 社会人を対象とした人材育成プログラムにおける社会実践」という題目で京都大学経営管理研究部の倫理審査の承認を受けている(受付番号 第24-011号)。

表1: SCL講座日程詳細

日程	区分	時間・講師	タイトル	概要
7月13日 (土)	オリエンテーション	10:00-10:30 蓮行		
	演習1	10:30~13:30 水越伸	『メディアリテラシー・ワークショップ: 当たり前を当たり前じゃなくする知恵と技法』	メディア・リテラシーに関するレクチャー／ワークショップ
	演習2	14:30~17:00 蓮行	『ワークショップとは? 演劇を活用したアクティビティとファシリテーション基礎編』	「ワークショップ」全般、および演劇的手法を用いたアクティビティの実施
	実習	17:00~18:00	講義のふりかえり	
7月20日 (土)	演習3	10:00~13:00 いいむろなおき	『マイムから学ぶ非言語コミュニケーション』	マイム体験を通じた非言語コミュニケーションに関するワークショップ
	研修1	14:00~17:00 奥野美里	『可視化で共同の場をつくる“グラフィック・ファシリテーション”』	対話を絵などを用いて視覚的に記録する「グラフィック・ファシリテーション」の実践ワークショップ
	実習	17:00~18:00	講義のふりかえり	
8月3日 (土)	演習4	10:00~13:00 城下英行	『まなびのための防災教育のデザイン』	防災に関する事例紹介と実際的な技法に関する講義
	演習5	14:00~17:00 岡田浩	『臨床研究COMPASSプロジェクトから考える実装プロジェクトの進め方』	薬局薬剤師による介入研究「COMPASS研究」の事例紹介、および行動経済学等に関する理論の講義
	実習	17:00~18:00	コミュニケーションデザイン相互実践	演習で学んだ技法を用いて、受講者が主体的にチームでワークショップを作る時間。9月7日の実習において相互に発表(以下同様)
8月17日 (土)	研修2	10:00~13:00	前期生によるワークショッププログラム	SCL6期生有志によるワークショップ
	実習	17:00~18:00	コミュニケーションデザイン相互実践	
8月24日 (土)	演習6	10:00~13:00 丸本瑞葉	『Emotion Driven - 感情を重視した新規事業創出プロセス』	勘定を用いた新規事業創出に関する事例紹介と体験ワークショップ
	実習	17:00~18:00	コミュニケーションデザイン相互実践	
9月7日 (土)	演習7	10:00-13:00 蓮行	『ワークショップとは? 演劇を活用したアクティビティとファシリテーション応用編』	13日に学んだ技法の復習と応用を行うワークショップ
	実習	17:00~18:00	コミュニケーションデザイン相互実践発表	「コミュニケーションデザイン相互実践発表」の発表

表2: 質問項目 (事前アンケート)

1. お勤め先の事業内容、またはご専門を教えてください	短文回答
2. 今回の講座をどのような方法で知られたかお聞かせください。 <ul style="list-style-type: none"> ・SCL養成講座ホームページ ・関西大学梅田キャンパスホームページ ・Facebook(運営事務局:ACCD) ・Facebook(関西大学) ・twitter ・メールマガジン ・講師からの紹介 ・知人からの紹介 ・peatix ・その他 	多肢選択
3. どのようなことをきっかけに受講を決められましたか	短文回答
4. 本講座でどのようなスキルが身につくことを期待されますか？	短文回答
5. 本講座を受講する目標・目的はなんですか？	短文回答
6. どのようなキーワードが気になって受講されましたか？ <ul style="list-style-type: none"> ・「ソーシャルコミュニケーション」 ・「メディア論」 ・「メディアリテラシー」 ・「多様性」 ・「ダイバーシティ」 ・「インクルーシブデザイン」 ・「科学／サイエンス」 ・「アート」 ・「ワークショップ」 ・「演劇」 ・「健康行動科学」 ・「行動経済学・ナッジ」 ・「グラフィック・ファシリテーション」 ・「マイム」 ・「新規事業創出」 ・「防災教育」 ・「コミュニケーションデザイン」 ・その他 	多肢選択

表3: 質問項目 (事後アンケート)

<p>1. 受講申込時の目的・目標は何でしたか？(複数回答可)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「コミュニケーション環境のデザイン」の理論・技法の修得 ・「ファシリテーション」の技術の修得 ・同じ課題を持つ方との交流と人脈形成 ・キャリア形成 ・その他 	<p>多肢選択式 (複数選択可)</p>
<p>2. 質問1の「目的・目標」は本講座でどの程度達成されましたか？</p> <ul style="list-style-type: none"> ・目標を大幅に達成 ・十分に達成 ・達成 ・目標を下回った ・目標を大幅に下回った 	<p>多肢選択式 (段階評価)</p>
<p>3. 今回の講座は事前に期待されていた内容と比べていかがでしたか？</p> <ul style="list-style-type: none"> ・期待以上だった ・期待通りだった ・どちらともいえない ・期待通りでなかった ・全く期待通りでなかった 	<p>多肢選択式 (段階評価)</p>
<p>4. 質問3(期待していた内容との比較)の回答理由について、お聞かせください。</p>	<p>短文回答</p>
<p>5. 演習・研修(講師／前期生による講義)の中で特に印象に残ったコマをその理由とともに教えてください。</p>	<p>短文回答</p>
<p>6. 実習で印象に残ったことを教えてください。</p>	<p>短文回答</p>
<p>7. 受講全体を通じて、学びになったことや得られたこと、今後活かそうなことを教えてください。</p>	<p>短文回答</p>
<p>8. 本講座を友人・知人に参加を勧める可能性はどの程度ありますか？ (10段階評価)</p>	<p>多肢選択式 (段階評価)</p>
<p>9. 質問8(友人知人へのおすすめ可能性)の理由を教えてください</p>	<p>短文回答</p>
<p>10. 以下の語について、講座を通じて「印象が良くなった」語があれば、その理由も含めて教えてください</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「ソーシャル・コミュニケーション」 ・「メディア論」 ・「メディアリテラシー」 ・「多様性」 ・「ダイバーシティ」 ・「インクルーシブデザイン」 ・「科学／サイエンス」 ・「アート」 ・「ワークショップ」 ・「演劇」 ・「健康行動科学」 ・「行動経済学・ナッジ」 ・「グラフィック・ファシリテーション」 ・「マイム」 ・「新規事業創出」 ・「防災教育」 ・「コミュニケーションデザイン」 ・特になし 	<p>多肢選択式 (段階評価)</p>

11. 質問10で「印象が良くなった」語として選んだ理由	短文回答
<p>12. 以下の語について、講座を通じて「印象が悪くなった」語があれば、その理由も含めて教えてください</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「ソーシャル・コミュニケーション」 ・「メディア論」 ・「メディアリテラシー」 ・「多様性」 ・「ダイバーシティ」 ・「インクルーシブデザイン」 ・「科学／サイエンス」 ・「アート」 ・「ワークショップ」 ・「演劇」 ・「健康行動科学」 ・「行動経済学・ナッジ」 ・「グラフィック・ファシリテーション」 ・「マイム」 ・「新規事業創出」 ・「防災教育」 ・「コミュニケーションデザイン」 ・特になし 	多肢選択式 (段階評価)
13. 質問12で「印象が悪くなった」語として選んだ理由	短文回答
<p>14. 以下の語について、講座を通じて「関心が高まった」語があれば、その理由も含めて教えてください</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「ソーシャル・コミュニケーション」 ・「メディア論」 ・「メディアリテラシー」 ・「多様性」 ・「ダイバーシティ」 ・「インクルーシブデザイン」 ・「科学／サイエンス」 ・「アート」 ・「ワークショップ」 ・「演劇」 ・「健康行動科学」 ・「行動経済学・ナッジ」 ・「グラフィック・ファシリテーション」 ・「マイム」 ・「新規事業創出」 ・「防災教育」 ・「コミュニケーションデザイン」 ・特になし 	多肢選択式 (段階評価)
15. 質問14で「関心が高まった」語として選んだ理由	短文回答

<p>16. 以下の語について、講座を通じて「関心が薄れた」語があれば、その理由も含めて教えてください</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「ソーシャル・コミュニケーション」 ・「メディア論」 ・「メディアリテラシー」 ・「多様性」 ・「ダイバーシティ」 ・「インクルーシブデザイン」 ・「科学／サイエンス」 ・「アート」 ・「ワークショップ」 ・「演劇」 ・「健康行動科学」 ・「行動経済学・ナッジ」 ・「グラフィック・ファシリテーション」 ・「マイム」 ・「新規事業創出」 ・「防災教育」 ・「コミュニケーションデザイン」 ・特になし 	<p>多肢選択式 (段階評価)</p>
<p>17. 質問16で「関心が薄れた」語として選んだ理由</p>	<p>短文回答</p>
<p>18. その他ご意見があればご自由にお聞かせください。(今回の講座に関することや、今後キャンパスで扱ってほしいテーマなど)</p>	<p>短文回答</p>
<p>19. 姉妹講座、京都大学ソーシャル・コミュニケーションデザイナー養成講座の受講可能性はどれくらいありますか (10段階評価)</p>	<p>多肢選択式 (段階評価)</p>
<p>20. 質問19の理由を教えてください</p>	<p>短文回答</p>

図1: アンケート内に付記された協力依頼文言(抜粋)

—ご協力をお願い—

関西大学梅田キャンパスにおいて、7月～9月にかけて開講する「関西大学ソーシャル・コミュニケーションリーダー養成講座」(通称:関西大学SCL)を対象とした研究を実施させていただきたく、お願い申し上げます。

本研究では、関西大学SCLの講座プログラムと、受講生にとってもたらされた学びとの関連について、質的・量的に検討することを目的としています。本研究の成果の一部は、教育学系の研究雑誌に投稿する予定であるほか、本講座の内容をより良いものにするために活用いたします。

受講生のみなさんに、後述のとおり説明するデータの収集についてご同意いただきたく存じます。本調査の趣旨にご賛同いただけるようでしたら、同意書をご提出ください。なお、この調査研究へのご協力はあくまで任意のもので、協力に同意しなくても、授業の成績評価には全く影響しませんので、ご安心ください。どうぞよろしくお願い申し上げます。

京都大学経営管理研究部

特定准教授 蓮行
特定助教 末長英里子

記

(1) 本研究の目的と位置づけ

- 本調査研究は、関西大学SCLの講座プログラムと、受講生にとってもたらされた学びとの関連について、質的に検討することを目的としています。
- 関西大学梅田キャンパスにおいて開講する「関西大学ソーシャル・コミュニケーションリーダー養成講座」(通称:関西大学SCL)を対象として実践研究を行います。
- 本研究は、わたくし蓮行を研究代表者とし、末長英里子(京都大学特定助教)を研究分担者として実施します。

(2) 取得するデータ

- 関西大学SCL第7期について、下記のデータを取得いたします。同意を得られなかった方に関しては、学術資料の収集及び使用はいたしません。
- 授業実践を撮影したビデオ記録、写真記録、研究者の観察記録
- 事前事後アンケートによる分析
- 受講生から、本講座の課題の一環として提出されるレポート
- インタビュー調査(所要時間60分程度)
- 履修生のみなさんの中から数名に、個別でお願いさせていただきます。

(3) データの扱い

- 全ての調査は任意であり、調査協力を同意いただいた場合のみ実施いたします。また、途中で同意を撤回することもできます。資料の使用の中止につき申し出があった場合は直ちに使用を中止します。
- データのテキスト化および分析の作業は、各研究者または大学に所属する特定のアルバイト調査員によって、研究者の厳重な監督のもと行われます。
- すべてのデータは研究代表者研究室内の文書ファイリングシステム及びコンピュータ内において厳重に管理し、第三者に情報が漏れることのないよう取り扱います。保存期間は、京都大学の規定する期間(論文、学会発表などでの研究成果発表後10年間)であり、これを過ぎたら全て破棄します。

(4) 研究成果の発表予定

- データ分析の結果は、学会発表、学術論文としての公表を予定しています。本研究のメンバーである蓮行、末長によって公表される予定です。
- 研究成果の公表に際しては、個人が特定されないようにすべてのデータにつき匿名化の処理を行います。
- 上記の内容を遵守するとともに、京都大学経営管理大学院の研究倫理規定に準拠しつつ研究を実施いたします。

3 結果と考察

以下、「うえの式」の分析の手順に従い、分析・考察を記述する。

3-1 カテゴリー

まず、アンケートの短文回答をユニットと解釈し、それらの間での関連性のあるものを集積した。これらのユニットの集合にはそれぞれ「カテゴリー」名を付した。以下、表4・5において、事前・事後アンケートから抽出されたカテゴリーを一覧できるかたちで表記している²。

表4: カテゴリー一覧(事前アンケート)

質問	カテゴリー	ユニット(抜粋)
3 <受講のきっかけ>	人から聞いて知る	・校長に勧められた ・説明会に参加し、面白そうだった
3 <受講のきっかけ>	コミュニケーションは難しい	・コミュニケーションに不安があるため ・対話の場づくりをしているが学びがない
3 <受講のきっかけ>	職場環境を良くしたい	・施設の職員間のコミュニケーション向上 ・人材育成、離脱者を出さないための取り組み方習得
3 <受講のきっかけ>	普段関わりのない人たちに会いたい	・多様なバックグラウンドの人と、新たなアプローチからコミュニケーションを学びたい ・次世代の教育
3 <受講のきっかけ>	社会性を身につけたい	・普通の学校に活かしたい ・ファシリテーション向上／ファシリテーターのスキルを身につけたい
4 <身につくスキル>	視野を広げる	・多様な視点の持ち方 ・多角的に考え、行動する力
4 <身につくスキル>	人を惹きつける人になる	・人間的な魅力 ・自分のあり方の見直し
4 <身につくスキル>	発言しやすい環境を作る	・ファシリテーション力 ・場づくり ・話しやすい雰囲気づくり
4 <身につくスキル>	聞き上手になる	・コミュニケーション力 ・参加者全員の気付きが引き出せるデザイン力 ・傾聴のスキル
4 <身につくスキル>	伝え上手になる	・伝え方の工夫ができるようになる ・場に適したコミュニケーション方法
5 <目標・目的>	仕事で成功する	・手法を児童・生徒に使えるのでは ・脚本・演出で主催者になる ・キャリア形成に役立てる
5 <目標・目的>	世代を超えて交流する	・異業種・多世代の人と知り合い学ぶ ・広い世代が自然に交わる場所を作りたい
5 <目標・目的>	人を育てる	・生徒たちとの関わりに活かす ・学び方の模索と教育の研究

² 表記は回答をそのまま踏襲しているため、誤字・誤表記などもそのまま反映している。

5 <目標・目的>	リーダーに必要な資質を身につける	・グループの中心でのふるまい方、議論の進め方、回りのまきこみ方を学ぶ ・生徒たちとの関わりに活かす
5 <目標・目的>	居心地のいい場所を作る	・自分でつくる対話の場のクオリティ上がる ・勤めている施設の雰囲気をもよほす

表5: カテゴリー一覧(事後アンケート)

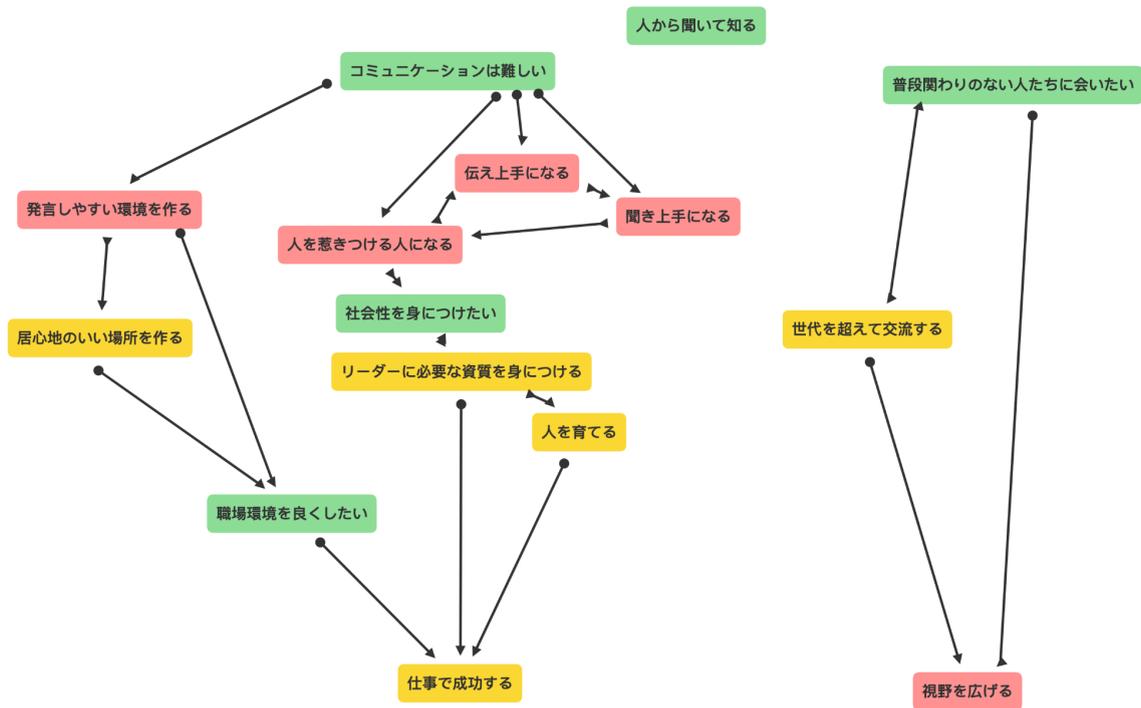
質問	カテゴリー	ユニット(抜粋)
4 <期待していた内容との比較>	すぐに応用したい	・似たようなワークでも少しの工夫でスムーズなファシリテートができると感じた ・参加型、体験を通じて学ぶので、自分のものになりやすい
4 <期待していた内容との比較>	体験してみるとわかる	・理解が遅いので繰り返しやらないと身につかない ・参加型で体験を通じて学習できるので、自分のものになりやすい ・理論だけでなく体験ができるので良かった
4 <期待していた内容との比較>	期待以上の収穫	・この講座に参加しなければ受講できないものばかり ・同じような困ってる仲間と話す機会が貴重だった ・発想の転換のポイントを持てた
4 <期待していた内容との比較>	期待通りの結果	・事前の説明会どおりで満足 ・課題に感じていたことを学べた
4 <期待していた内容との比較>	色々な先生から学ぶ	・様々な職業の先生から得られる学びが想像以上 ・多様な講師陣の講義やワークに圧倒
4 <期待していた内容との比較>	具体的に知りたい	・短期間のワークショップをもう少し学びたかった ・もっと体系的に学べると思っていた ・もっとファシリテーションをたくさんやりたかった ・もう少し具体的な場作りのステップやプロセスが学べると思っていた
5 <印象に残った講義>	使い勝手がいい	・件の宣言、汎用性高く面白かった ・おくのみさとさん→面談の場で活かしたい
5 <印象に残った講義>	説明に説得力がある	・動的判断理由がいちばん納得できた ・各会のミニディスカッションやワークの問い1つ1つがよく練られていると感じた ・クロスロードというゲームから学ぶところが多かった
5 <印象に残った講義>	心に残るフィードバック	・最終回の先生のコメントがすばらしすぎた ・最終講義のワーク後のフィードバック(運行):短時間でここまでの意味づけを伝えられるとは
5 <印象に残った講義>	理論がわかりやすい	・防災のコマ。理論と底に至るプロセスがわかりやすかった ・学びのための防災デザイン(城下):コミュニケーションの本質的な内容や対話の種類を学べたのが予想以上によかった
5 <印象に残った講義>	ヒントをもらう	・Emotion Drive:問題や原因を挙げるのに苦労していたが、学んだことを応用していく ・多様性の講座(佐藤)、自分が行き届かないヒントがもらえた ・感情重視の新規事業創出プロジェクト(丸本)→目からウロコ

6 <実習で印象に残ったこと>	動くものは目立つ	<ul style="list-style-type: none"> ・やたらと演劇(なりきり)させられること ・蓮行さんのポーズ
6 <実習で印象に残ったこと>	みんなで作る	<ul style="list-style-type: none"> ・大雑把なテーマに対してズームをとおして作り上げるのが楽しかった ・意見と発送がまざりあって、まとまっていくのが達成感 ・共有する場が多く、色んな意見をきけた
6 <実習で印象に残ったこと>	やってみると意外とできない	<ul style="list-style-type: none"> ・グラフィックはすぐ活用できるが、こちらの練習が必要 ・ワークショップを実際に作ることで、各会の授業の構成のすばらしさを感じられた
6 <実習で印象に残ったこと>	プロセスが結構大事	<ul style="list-style-type: none"> ・コミュニケーションのデザインという観点を持てた ・どんなワークショップをするのか、話し合いが有意義だった ・動的判断のプロセス開示
6 <実習で印象に残ったこと>	「コミュニケーション」って何なん	<ul style="list-style-type: none"> ・コミュニケーションには客観性をもてることが大事 ・お互いを尊重することへの姿勢 ・「心理的安全性」＝「批判を快く受けとめられる」であること
7 <全体を通じて学んだこと>	自分を理解する	<ul style="list-style-type: none"> ・自己理解につながった ・自分の得意な役割、未熟な視野・思考方に気付いた
7 <全体を通じて学んだこと>	知らなかったことを知る	<ul style="list-style-type: none"> ・ワークショップのひきだしがふえた ・アイデア出しにも技術がたくさんあるということ ・共感力を引き出すことの重要性
7 <全体を通じて学んだこと>	自分でやってみる	<ul style="list-style-type: none"> ・ワークをブラッシュアップしたい ・CTLのコツやテクニックは自分の仕事ですぐに実践できる ・早速、来週クロスロードをファシリテートしてやってみる
7 <全体を通じて学んだこと>	人と向き合う	<ul style="list-style-type: none"> ・人前で話したり全体をまとめることに対するハードル下がった ・コミュニケーション方法の広がり→職場で活かしたい ・グループワークや会議で、どのような態度・雰囲気をもっていると心地よい空間ができるのか体感できた

3-2 マッピング・チャート化

次に、上記のカテゴリーを用いて、マッピング・チャート化を行った。「うへの式」においては、概念の距離によって概念同士の類似性を示す。この近接性を示す作業をマッピングという。次に、メタ情報同士が因果・対立・相関のいずれの関係にあるかを、矢印を用いて示す。これをチャート化と呼ぶ。以下に示した図2・3は、事前・事後アンケートのカテゴリーに対して、マッピングとチャート化を行った「チャート図」である。

図2: 事前アンケートをデータとしたチャート図



▶ 凡例

緑●: 3<受講のきっかけ>

赤●: 4<身につくスキル>

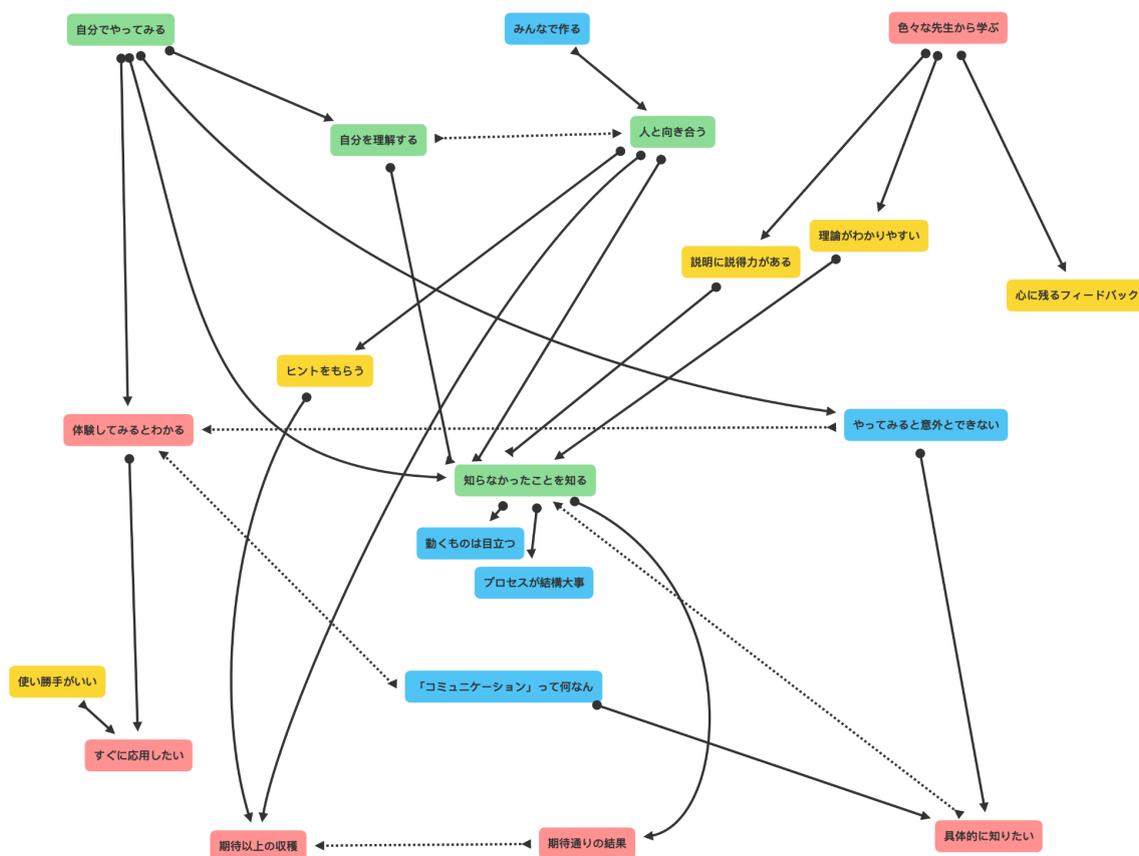
黄●: 5<目標・目的>

実線、A→B: 因果関係

破線、A⇒B: 対立関係

実線、A↔B: 相関関係

図3: 事後アンケートをデータとしたチャート図



▶ 凡例

赤 ● : 4 <期待していた内容との比較>

黄 ● : 5 <印象に残った講義>

青 ● : 6 <実習で印象に残ったこと>

緑 ● : 7 <全体を通じて学んだこと>

実線、A→B: 因果関係

破線、A⇒B: 対立関係

実線、A↔B: 相関関係

3-3 ストーリー化と考察

以上の図式化を通じて、事前アンケートと事後アンケートを以下のように分析することができる。

3-3-1 事前アンケートの分析

受講生はSCLに関して、「人から聞いて知る」形で受講に至っている。受講生の受講のきっかけは、大別すると二つに分けられる。これらはコミュニケーションへの課題意識（「コミュニケーションは難しい」）、および他者への関心（「普段関わりのない人たちに会いたい」「世代を超えて交流する」）である。

コミュニケーションへの課題意識に対しては、主に二つの解決の方針が志向される。一つが環境志向的解決(「発言しやすい環境を作る」「居心地のいい場所を作る」)、もう一つが能力志向型解決(「伝え上手になる」「聞き上手になる」「人を引き付ける人になる」)である。環境志向型は具体的なアウトプットのイメージ(「職場環境を良くしたい」)が伴う場合がある。また、能力志向型は様々な個別的な目標設定(「社会性を身につけたい」「リーダーに必要な資質を身につける」「人を育てる」)として表出される。

二つの課題に対する解決の志向性は、仕事への活用(「仕事で成功する」)に収斂する。その意味で、コミュニケーションへの課題意識は主に仕事という枠組みにおける問題であるといえる。一方、他者への関心は必ずしも仕事における関心ではない。そこではより一般的な人間的成長が志向されている(「視野を広げる」)。

3-3-2 事後アンケートの分析

受講生はSCLの活動を3種類に分割して認識している。それらは自分を主体化する活動(「自分でやってみる」)、集団を主体化する活動(「みんなで作る」)、専門家から学ぶ活動(「いろいろな先生から学ぶ」)である。これらの活動は、以下のルートを通じて知識の蓄積(「知らなかったことを知る」)に収斂していく。

「自分でやってみる」→「自分を理解する」→「知らなかったことを知る」
「みんなで作る」→「人と向き合う」→「知らなかったことを知る」
「いろいろな先生から学ぶ」→「説明に説得力がある」「理論がわかりやすい」→「知らなかったことを知る」

SCLを通じて蓄積される知識には「動くものは目立つ」「プロセスが結構大事」などがあつた。

自分を主体化する活動を通じて得られるものには、知識の他に体験的な効用感がある。例として、「体験してみるとわかる」にカテゴライズした「参加型で体験を通じて学習できるので、自分のものになりやすい」といったコメントが挙げられる。また、効用感さらなる活動へのモチベーション(「使い勝手がいい」「すぐに応用したい」)などを引き出していた。

一方で、体験を通じた不能感(「やってみると意外とできない」)やさらなるコミュニケーションへの疑問(「『コミュニケーション』ってなんなん」)といった感覚も生起することがわかつた。これらの感覚は「具体的に知りたい」という、知識の欠如感の生起とつながっていた。知識の蓄積と知識の欠如感が同時に生起していたことは、注目に値する。

集団を主体化する活動は相互行為(「人と向き合う」)を通じて気づきの獲得(「ヒントをもらう」)に繋がり、最終的に講座に対する期待を上回る満足度(「期待以上の収穫」)を生み出していた。一方で、知識の蓄積は期待通りの満足度(「期待通りの結果」)につながっており、二つの最終的な満足度の差異は強調した活動の分類につながっていた。

専門家から学ぶ活動は知識の蓄積以外に、能力に対する尊敬の感覚(「心に残るフィードバック」)ともつながっていた。

3-3-3 考察

事前アンケートを通じて明らかになるのは、受講に向うモチベーションが大きく二つの志向と目的に分かれることである。コミュニケーションへの課題意識は仕事への活用に、他者への関心は人

間的成長へとつながっていた。この分割が存在していることから、少なくとも一部の受講生において、関心が仕事への活用、すなわちリカレント教育としてのそれに必ずしも限定されるわけではなく、より全人的な関心を寄せている可能性が示唆された。一方、項目の量は圧倒的にコミュニケーションへの課題意識に関する言及が多いことから、中心的な関心はコミュニケーション＝仕事をめぐるものであることが推察される。

コミュニケーションへの課題意識内でも解決の志向性が二種類見られた。環境と属人的能力をそれぞれ志向した解決である。SCLの目的が「個々の多様性を活かすコミュニケーション環境をデザインし、ファシリテートすることのできる支援人材を養成する」ことであることを鑑みると、環境志向型解決がより講座のテーマ性と合致すると言える。受講生の一部は講座を受ける以前からコミュニケーションを環境の問題として捉える視点を持っていたことがうかがえる。一方、言及の量は能力志向型解決に関するものが比較的多かったことから、受講生の多くはSCLにふれる以前はコミュニケーションの問題を属人的な能力の問題(さらにいえば「自身の」能力の問題)として捉える視点を持っていたことが示唆される。

事後アンケートを通じて明らかになったのは、多くの活動が知識の蓄積と体験的な効用感に寄与するものとして捉えられていた点である。コミュニケーションに関する「知識」と「体験」の差異は曖昧なものであるため、両者は相互に深く関係している。例えば、「共感力を引き出すことの重要性」「知らなかったことを知る」という知識はこの受講生の以降のコミュニケーションを方向づけるものであるが、それは客観的な事実というよりは、体感的なヒューリスティクスに近いものである。

この知識と体感の分かちがたさ／曖昧さは、事後アンケート結果の両義性として現れている。例えば、体験的な効用感と不能感、知識の獲得と欠如感がともに結果から読み取れる。これらの回答は異なる受講生によるものであるため、差異があること自体は当然である。しかし、個別のユニットに目を向けると、「理解が遅いので繰り返しやらないと身につかない」「体験してみるとわかる」や「ワークショップを実際に作ることで、各会の授業の構成のすばらしさを感じられた」「やってみると意外とできない」など、知識を獲得することを通じて知識が不足していることに気づく経験を指し示している可能性も示唆されている³。その意味で、SCLにおける知識の獲得感と欠如感、体感的な効用感と不能感は、同時に生起するものである可能性があると言えるのではないだろうか。

本稿では「ポスト近代型能力」を涵養することを謳うリカレント教育プログラムを経て、学習者である社会人受講生の講座内容の理解の仕方を分析することを目的としていた。その点に立ち戻って考察をまとめると、以下ようになる。SCLのような講座を受講していることから、受講生は「ポスト近代型能力」を、部分的にせよ、学習可能なものとして理解していると考えられる⁴。事前アンケートでは、その理解の仕方の特徴が示された。受講動機として挙げられたものの多くは、仕事に資する置く人的能力の蓄積への志向を示すものだった。事後アンケートでこの理解が根本的に揺らぐことはなかったものの、「知識」や「体験」の両義的側面がアンケート内容から示唆された。その意味で、受講生は「ポスト近代型能力」を学ぶという経験を通じて、一面は知識や効用感が得られたが、その知識や効用感を起点として更に学ばなければならないこと、あるいは身に付けなければならない能力に対する気づきを得ていたと考えられる。

³ 一方で、「もっと体系的に学べると思っていた」「もっとファシリテーションをたくさんやりたかった」「もう少し具体的な場作りのステップやプロセスが学べると思っていた」(具体的に知りたい)など、当初もっていた講座のイメージと実際の内容のミスマッチがそのまま不満として表出しているケースも少なからず存在した。

⁴ ここでは所属団体の指示などにより、消極的に参加している可能性は排除している。アンケートの文面からはそのような受講生の存在は確認できなかったが、不在を確定的に述べることはできないため、留保は必要である。

4 おわりに

最後に、今後の課題を述べる。本稿の分析においてはアンケート回答の一部だけを用いて分析を行ったため、さらなる分析を行うことは可能である。例えば、アンケートの他項目との関連について、量的な方法も含めて分析を行うことは可能であろう。また、最終的に示した解釈の妥当性に関して、追って調査をする必要がある。回答者の追跡や、他の講座の受講生などへのアンケートの実施などの方法が考えられるだろう。

また、本稿の分析を通じて付随的に明らかになったこととして、うへの式をアンケート分析に用いることの利点と課題が挙げられる。アンケートの短文回答の分析においては、発話者によるユニット化が自動的に行われるという意味で、分析者の恣意性が入り込む余地が少ないと言える。一方、回答者が複数人にわたるため、ユニット化の一貫性を担保することはできない。分析の方法的な精緻化も今後の研究での課題であろう。

謝辞

本研究は関西大学梅田キャンパスの協力があって可能になりました。深謝申し上げます。

参考文献

濱中倫秀・三井規裕, 2021, 「新卒採用時に企業が求める『コミュニケーション能力』についての考察」『成安造形大学 紀要』(12): 35–46.

本田由紀, 2005, 『多元化する「能力」と日本社会——ハイパー・メリトクラシー化のなかで』NTT出版.

本田由紀, 2023, 「日本の学び直しの課題は何か 専門性を評価する仕組みづくりを」. 情報労連リポート. (2023年1月18日. <http://ictj-report.joho.or.jp/2301-02/sp01.html>).

関西大学, 2024, 「関西大学ソーシャル・コミュニケーションリーダー(SCL)養成講座 第7期」KANDAI Me RISE. (参照 2025年1月30日. <https://kandai-merise.jp/event/1295/>).

宮崎里司, 2023, 「学習者がめざす21世紀型スキルとリスキリング」『早稲田日本語教育実践研究』11: 1–3.

森玲奈, 2014, 「日本におけるワークショップの展開とその特質に関する歴史的考察」『教育方法学研究』39 (0): 49–58.

SCL養成講座. 2023, 「募集中の講座情報」. ソーシャルコミュニケーションリーダー養成講座, (<https://www.accd-c.org/SCL/next/>).

柴田惇朗・紙本明子・大山溪花・末長英里子・蓮行, 2024, 「社会人向けリレー講座における『コミュニケーションデザイン』の構成——講師のディスコース分析を通じて」『京都大学経営管理大学院 経営研究センター ワーキングペーパー』: 1–13.

砂原雅夫・金珉智, 2022, 「リカレント教育の歴史的変遷及び日本経済に与える影響について」『教育経済学研究』1 (0): 50–61.

上野千鶴子監, 一宮茂子・茶園敏美編, 2017, 「語りの分析〈すぐに使える〉うへの式質的分析法の実践」『生存学研究センター報告』27.

上野千鶴子, 2018, 『情報生産者になる』ちくま新書.

吉岡洋介, 2018, 「大卒就職機会における学校歴仮説とコミュニケーション能力」. ソシオロジ 62 (3): 3–20.